

# 古英語 *swingel* とラテン語 *virga* について

石 原 覚

## I

古英語 *swingel* とラテン語 *flagellum* および *verber* は「鞭打ち」の意味を共有するため、*swingel* はしばしば *flagellum*, *verber* の訳語として用いられる。また古英語 *gierd* とラテン語 *virga* は「細枝、杖、鞭」の意味を共有するため、Bosworth-Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (BT)<sup>1</sup> が *gyrd* の項で *virga* を対応するラテン語に挙げているように、*gierd* は *virga* を訳すのに組織的に用いられる。しかるに、*gierd* ではなく、*swingel* が *virga* の訳語となるケースが見られる。本稿では、なぜこのような古英語訳が行われたのかについて考えてみたい。

まず *swingel*, *flagellum* と *verber* の基本的意味を確認しておく。

*swingel* は、イエスの受難を述べた (1) に見られるように、「鞭打ち」の意味を表す古英語である。

(1) *hie hine bindað & swingað & spætliað on his onsyne; & æfter þære swinglan hie hine ofsleað; (HomS 8 8)<sup>2</sup>*

(彼らは彼を縛り、鞭打ち、顔に唾を吐きかける。そしてその鞭打ちの後彼らは彼を殺す。)

この例は BT の *swingel* I(b) の「鞭打ち」(“*a scourging, whipping, flogging*”) の語義において引用されている。

この語は、同辞典が *swingel* II で「(比喩的に) 懲罰, 苦しみ」(“*figurative, chastisement, affliction*”) の語義を示すように、比喩的意味においても用いられる。例えば (2) で *swingel* はヨブの苦難を表す。

(2) *He soðlice leofode æfter his swingle an hund geara. and feowertig geara. and ge-seah his bearna bearn. oð ða feorðan mægðe; (ÆCHom II, 35 267.221)<sup>3</sup>*

(まことに彼は自分への鞭打ちの後 140 年間生き、その子供たちの子供たちを

4代まで見た。）

B. Thorpe は (2) の *swingel* を「苦しみ」(“affliction”) と訳している。<sup>4</sup>

ラテン語 *flagellum* と *verber* はともに、姦夫の苦しみを述べた (3)、高利貸しから負債者の息子への暴行を述べた (4) に見られるごとく、「鞭」の原義を持つ。

(3) *hic se praecipitem tecto dedit; ille flagellis / ad mortem caesus; (Hor. S. 1.2.41)*<sup>5</sup>

(ある者は屋根から真っ逆様に落ち、他の者は鞭で／死ぬまで打たれた。)

(4) *nudari iubet verberaque adferri. (Liv. 8.28.4)*<sup>6</sup>

([その青年を]裸にして、鞭を持ってくるように命じた。)

(3) は Glare, *Oxford Latin Dictionary (OLD)* の *flagellum* 1.a の「(処罰の道具としての)鞭」(“A whip, lash: a (as an instrument of punishment)”)において、(4) は同辞典の *uerber* 1 の「(複数)鞭打ちのための道具、おそらくは小枝・紐などを束ねたもの(単数も)」(“(pl.) An instrument for flogging, perh. a bundle of twigs, cords, etc., (also sg.)”)において、すなわちそれぞれの項目の第一義において、挙げられている例である。

なお、*flagellum* と *verber* にはともに、イエスの受難についての (5)、子供たちへの罰についての (6) におけるごとく、「鞭」とも「鞭打ち」ともとらえられる場合が見られる。(以下そのように両義に解釈される場合には「鞭(打ち)」と表記する。)

(5) *sputa, flagella, alapas, spineam coronam, crucemque sustinuit; (GREG.MAG. Hom.evang. 2, 1085C)*<sup>7</sup>

(唾、鞭(打ち)、平手打ち、茨の冠、十字架に耐えた。)

(6) *pueros vero matres et magistri castigare etiam solent, nec verbis solum, sed etiam verberibus, si quid in domestico luctu hilarius ab iis factum est aut dictum, plorare cogunt. (Cic. Tusc. 3.64)*<sup>8</sup>

(確かに母親や教師たちは、もしも家庭が悲嘆の中にあるとき子供たちによって何か陽気なことがなされたり言われたりすれば、彼らを懲らしめるのが習いでさえあり、言葉のみならず鞭(打ち)によっても、強いて泣きわめかせる。)

(6) は、*OLD* では (4) とともに第一義の *uerber* 1 (「鞭打ちのための道具」) に挙

げられた例であるのに対し、Lewis-Short, *A Latin Dictionary*<sup>9</sup> では *verber* II.B の「(抽象的) 鞭打ち」(“Abstr., a lashing, scourging, flogging, etc.”) に挙げられた例である。

これら 2 語はともに比喩的意味でも用いられる。例えば (7) で *flagellum* は主の懲らしめを表すのに、また (8) で *verber* はヨブの苦難を表すのに使用されている。

(7) *sequens impetum fluxus mei relicto te, et excessi omnia legitima tua nec euasi flagella tua: (AUG. Confess. 2.2.4)*<sup>10</sup>

(私の流れの激しさに従い、あなたを捨て、私はあなたのすべての規定を越えたが、あなたの鞭(打ち)を免れなかった。)

(8) *quia mentis innocentiam, quam gloriose tenuit in tranquillitate, gloriosius seruauit in uerbere. (GREG.MAG. Moral.Iob. 3.2.2)*<sup>11</sup>

(平静において立派に保った精神の無垢を、鞭打ちにおいてさらに立派に維持したが故に。)

(7) は Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*<sup>12</sup> の *flagellum* 3 の「(比喩的) 禍<sup>わざわい</sup>, 災難(古典時代後), 苦しみ, 懲罰」(“(fig.) fléau, malheur (postcl.), peines, châtement”) において、(8) は同辞典の *uerber* 2 の「苦しみ, 罰」(“affliction, punishment”) において挙げられている例である。

以上、*swingel*, *flagellum* と *verber* の語義を概観したが、以下 (9) ~ (12) に、*swingel* が *flagellum*, *verber* を訳すのに用いられている例を、古英語訳とラテン語原文を並べて示したい。

文字通りの「鞭(打ち)」を意味する *flagellum*, *verber* が *swingel* に訳された例を次に挙げる。イエスの受難についての (9) では *flagellum* が、聖人への虐待についての (10) では *verber* が、*swingel* をもって訳されている。

(9) *Se ilca se us gefreoð mid his forespræce from ecum witung, se ilca suigende geðafode swingellan. (CP 36.261.10)*<sup>13</sup>

(その執り成しにより永遠の罪から我々を救うその同じ人、その同じ人は黙って鞭打ちに耐えた。)

*quod . . . tacitus flagella toleravit; (GREG.MAG. Reg.past. 3.12, 69C)*<sup>14</sup>

（……黙って鞭(打ち)に耐えたこと。）

(10) Tealde & wende þæt he mid *swinglan* sceolde þa beldu & þa anrednesse his heortan anescian, ða he mid wordum ne mihte. (Bede 1 7.36.32)<sup>15</sup>

（言葉で弱められない彼の心の勇気と堅固さを，鞭打ちで弱められると思いついた。）

autumans se *uerberibus*, . . . cordis eius emollire constantiam. (BEDA. Hist.eccl. 1.7, 30)<sup>16</sup>

（……彼の心の堅固さを鞭(打ち)で弱めようと思った。）

比喩的に用いられた *flagellum*, *verber* が *swingel* をもって表されている例としては以下がある。(11)では修道院長の長年にわたる盲目の苦しみを表す *flagellum* が，(12)では((11)と同じ人物について)永罰の苦しみを表す *verber* が，*swingel* へと訳されている。

(11) ac þa þa he wæs geswænced mid þæs lichaman *swinglan*, he hæfde symble þa beorhtan frofre þurh þa gehylde þæs halgan gastes. (GDPref and 4 (C) 11.274. 26)<sup>17</sup>

（彼はこの肉体への鞭打ちに苦しめられていたが，聖霊の保護により，常に明るい慰めを得た。）

Qui cum *flagello* fatigaretur corporis, . . . (GREG.MAG. Dial. 4.11.2)<sup>18</sup>

（彼は肉体への鞭打ちに苦しめられていたが，……）

(12) þysne se ælmihtiga God & se mildheorta, þeh þe he hine her swunge & þreade, he hine swa þeh gescylde fram þære ecan *swinglan* (GDPref and 4 (C) 11.274.6)

（この人を，全能で慈悲深い神は，ここで打ち，懲らしめたのではあるが，永遠の鞭打ちから保護した。）

Hunc omnipotens et misericors Deus ab aeterno *uerbere* flagellando protexit, (GREG.MAG. Dial. 4.11.1)<sup>19</sup>

（この人を，全能で慈悲深い神は，鞭打つことにより永遠の鞭打ちから保護した。）

## II

本章では，*swingel* の用例を一つないしはいくつか挙げて（「鞭打ち」ではなく）

「鞭」の意味がこの語にあると主張する、二三の先行研究を批判したい。

BT は *swingel* I(c) の「鞭」(“*a scourge, rod, whip*”) の語義のもとに、以下のラテン語 *palma* (手の平) に与えられた注解を、唯一の例として挙げている。

(13) *palmarum, swincla* (AldV 13.1 4486)<sup>20</sup>

この *palma* は以下の聖女への虐待のくだりにおいて現れるものである。

(14) *confestim furibundus catastarum crudelitatem exercuit, lividas palmarum vibices exhibuit, torrentes lampadarum flammam applicavit.* (ALDH. Pros.virg. 47, 301.23)<sup>21</sup>

(直ちに凶暴な者は [焼き殺すための] 鉄床の残忍さを加え、平手(打ち)による青黒い<sup>あざ</sup>瘡を付け、松明の灼熱の炎を当てた。)

確かに *palma* は、OLD の *palma* 1 の「手首から指先までの、手の前面部」(“The front part of the hand from the wrist to the finger-tips”) という第一義に挙げられている以下の例に見られるように、鞭の代わりになるものではある。

(15) *Is pro delectamento habebat, os hominis liberi manus suae palma verberare.* (Gel. 20.1.13)<sup>22</sup>

(彼は楽しみのために、自由人の口を自分の手の平で打ったものであった。)

しかし注意すべきことに、*palma* には「平手打ち」の意味もある。<sup>23</sup> 例えば以下のイエスへの虐待のくだりにおける *palma* はこの意味を表す。<sup>24</sup>

(16) *alii autem palmas in faciem ei dederunt* (Mt 26:67)<sup>25</sup>

(また他の者たちは彼の顔に平手打ちを加えた。)

問題の (14) の *palma* はこの「平手打ち」の意味でもとらえることが可能であり、よってそれに与えられた注解の *swingel* は、手の平そのものではなく、手の平による打撃を表現するために用いられた可能性がある。従ってこれを *swingel* に「鞭」の意味がある決定的な証拠と主張するのは不可能である。

また、Leo, *Angelsächsisches Glossar*<sup>26</sup> の *svingel* の項では、(13) と同じテキストにおいて、*flagrum*——この指小語 (diminutive) が *flagellum* である<sup>27</sup>——に与えられた以下の注解が、唯一の例として「鞭」(“*die Peitsche*”) の意味のもとに挙げられている。

(17) *flagra, swingla* (AldV 13.1 5364)<sup>28</sup>

この *flagrum* は以下のラテン文において比喩的に言葉について用いられている。

(18) ne, . . . rigida conviciorum *flagra* . . . experiamur! (ALDH. Pros.virg. 58, 318.12)  
(……悪罵の激しい鞭(打ち)を……受けることのないように。)

ここで *flagrum* は「鞭打ち」とも解釈可能であり、故にそれへの注解の *swingel* を、この語が「鞭」を意味する確実な証拠と見なすことはできない。

さらに、C. Brasch は、<sup>29</sup> 詩篇行間注解である PsGII<sup>30</sup> の U. Lindelöf によるグロッサリーにおいて挙げられている、<sup>31</sup> 主格・対格複数形の “*swingla*” および与格複数形の “*swinglum*” を、(Brasch が III として示す)「鞭」(“*Peitsche*”)の意味の用例として挙げている。これらは以下の5箇所 *flagellum*, *plaga* (打撃) および *verber* に与えられた注解である——“*Multa flagella peccatoris*” (31:10) (罪人への鞭(打ち)は多い), “*congregata sunt super me flagella*” (34:15) (鞭(打ち)が私の上に集まった), “*ego in flagella paratus sum*” (37:18) (私は鞭(打ち)の覚悟ができています), “*amoue a me plagas tuas*” (38:11) (あなたの打撃を私から遠ざけたまえ), “*Visitabo . . . in uerberibus peccata eorum*” (88:33) (私は……鞭(打ち)をもって彼らの罪に臨むであろう)。これらにおける *flagellum* および *verber* は、いずれも「鞭打ち」の意味でもとらえることが可能であり、また *plaga* は「打撃」の意味である。よってそれらに与えられた注解の *swingel* に、この語が「鞭」の意味を持つ確たる証拠を見出すことはできない。

### III

本章では、古英語 *gierd* とラテン語 *virga* との対応関係を示したい。

*gierd* と *virga* は、例えば (19) の建設資材としての *gierd*, (20) の貯蔵の対象としての *virga* に見られるごとく、それぞれ「細枝」という原義を持つ。

(19) and gefeðrige hys wænas mid fegrum *gerdum*, þat he mage windan manigne smicerne wah, (SolilPref 1.10)<sup>32</sup>

(その荷車に好ましい細枝を積むが良い。多くの見事な垣が編めるように。)

(20) *Virgas murteas si voles cum bacis servare et item aliut genus quod vis, et si ramulos ficulneos voles cum foliis*, (Cato Agr. 101)<sup>33</sup>

(ミルテ(銀梅花)の若枝や何であれ他の種類を果実とともに、またイチジクの小枝を葉とともに、保存したければ、)

(19) は Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement*<sup>34</sup> の *gird* I(1) の「木の細長い枝, (生えているか切り取られた) 植物の莖」(“a long thin bough of a tree or stem of a plant whether growing or cut off”), (20) は OLD の *uirga* 1 の「(木・低木などの) 若枝, 小枝, 細枝」(“A shoot, spray, twig (of a tree, shrub, etc.)”) という, それぞれ第一義義において挙げられている例である。

以下 (21) ~ (25) に, *gierd* が *virga* の訳語となっているケースを, 古英語訳とそれに対応するラテン語原文を並べて示そう。

(21) では, *gierd* と *virga* が「細枝」の意味を共有するが故に, 前者が建築素材としての後者を訳すのに使われている。

(21) *þæs huses hrof, se wæs mid gyrðum awunden & mid þæce beþcaht*, (Bede 3 8.180.27)

(細枝で編まれ, 葺き草で覆われたその家の屋根)

... quod erat *uirgis* contextum ... (BEDA. Hist.eccl. 3.10, 244)

(細枝で編まれ, ……)

次いで *gierd* と *virga* はどちらも「杖」の意味を表す。(22) では, 羊飼いであったモーセの杖を表す *virga* を訳すのに *gierd* が用いられている。

(22) *Witodlice he cwæp to hym: Hwæt is ðæt þu hæfst on þinre handa; þa andswarode he & cwæð: Hyt is gyrð.* (Exod 4.2)<sup>35</sup>

(まことに彼 [神] は彼に言った, 「お前が手に持っているものは何か」。そこで彼は答えて言った, 「杖です」。)

... Respondit: *Virga*. (Ex 4:2)

(……彼は答えた, 「杖です」。)

(22) に続く 16 箇所<sup>36</sup>における, モーセまたはアロンが奇蹟を行うための杖を表す *virga* も, 古英語訳 (Exod) において *gierd* により訳されている。また (23) では旅行者の杖が *gierd* で表されているが, これは *virga* に由来している。

(23) *ne codd on wege, ne twa tunecan ne gescy ne gyrde;* (Mt (WSCp) 10.10)<sup>37</sup>

(道中は袋も, 二枚の下着も, 履物も, 杖も [持つてはならない]。)

... neque calciamenta neque *virgam* (Mt 10:10)

(……履物も, 杖も [持つてはならない]。)

(23) に平行するマルコとルカの箇所 (Mc 6:8; Lc 9:3) における *virga* も、古英語訳 (WSCp) では *gierd* により訳されている。

さらに *gierd* と *virga* はともに「鞭」の意味で用いられる。パウロ書簡 (I Cor 4:21) の引用である (24) では、コリント人たちを罰するための鞭を表す *virga* が *gierd* を用いて訳されている。

(24) Hwæðer wille ge ðæt ic cume to eow, ðe mid *gierde* ðe mid monnðwære gæste?  
(CP 17.117.7)

(私があなたたちのもとに鞭を持って行くことと、優しい心を持って行くことの、どちらをあなたたちは望むのか。)

Quid vultis? In *virga* veniam ad vos. (GREG.MAG. Reg.past. 2.6, 36C)

(何をあなたたちは望むのか。私は鞭を持ってあなたたちのもとへ行こうか。)

またパウロへの虐待を述べた (25) でも、*gierd* が「鞭」を意味する *virga* を訳している。

(25) þæt is eac gesæd, þæt he for Cristes lufan lustlice gefafode, þæt he wære mid *gyrdum* beswungen, (GDPref and 3 (C) 17.217.28)

(彼はキリストへの愛のために喜んで鞭で打たれることに耐えたということも言われている。)

quod pro Christo *uirgis* libenter caeditur, (GREG.MAG. Dial. 3.17.10)

(キリストのために喜んで鞭で打たれたこと、)

#### IV

I および III において、それぞれ *swingel* と *flagellum*, *verber* との対応関係、*gierd* と *virga* との対応関係を明らかにした。本章では、これらの対応関係に当てはまらない、*swingel* が *virga* に対応するケースを示し、いかなる要因でこのような古英語訳が行われたのかを考察してみたい。

問題のケースは、以下の (26) にラテン語原文と並べて引いた、ベネディクトゥスの戒律 (Benedictine Rule) の Winchester 司教 Æthelwold による古英語訳の一節に見られる。これは同戒律の第 28 章——たびたび叱責されても改心し



ようとしなない修道士に対して修道院長が取るべき態度を述べた章——の一節であり、ここで古英語訳の *swingel* はラテン語原文の *virga* を表すのに用いられている。

(26) gif he sweðunga gegearwode and godcundra myngunga sealfunga, haligra gewrita lacnunga, and æt nyhstan amansumunge bærnnet and *swingella* wita þurhteah—and ongyt, þæt eal his hogu and gleawscipe naht framað, he þonne gegearwige, þæt þæt mæst is, his agen gebed and ealra broðra for hine, þæt drihten, þe ealle þing mæg and ealra þinga wylt, gehæle þone untruman and þone leahterfullan broðor. (BenR 28.52.11)<sup>38</sup>

(もしも彼が湿布と神聖な勧告の香油、聖書の薬剤を用意し、そして最後には破門と鞭打ちの苦しみの焼灼しょうしやくを用いて、それでも自分の配慮と努力が何の役にも立たないことに気付いたならば、最も強力なこと、[すなわち]自分と全兄弟の祈りを、彼のために用意せねばならない。何事もなすことができ、何事も支配する主が、この病める墮落した兄弟を癒すようにと。)

si exhibuit fomenta, si unguenta adhortationum, si medicamina scripturarum diuinarum, si ad ultimum ustionem excommunicationis uel plagarum *uirgae*, et iam si uiderit nihil suam praeualere industriam, . . . (BENEDICT. Reg. 28.3)<sup>39</sup>

(もしも湿布、勧告の香油、聖書の薬剤、最後には破門あるいは鞭の打撃の焼灼を用いて、それでも自分の努力が何の役にも立たないことに気付いたならば、……)

この *swingel* と *virga* の対応を論ずるに際し、まず (26) の直前の記述、すなわち第28章の最初の2節を、以下の (27) に古英語訳とラテン語原文を並べて引用する。(27) には2例の *swingel* が含まれており、最初の *swingel* はラテン語原文の *verber* (鞭(打ち)) に対応していることに注意されたい。(二番目の *swingel* はラテン語原文に対応する語がなく、最初のそれと同じ文脈で訳者により追加されたものである。)

(27) Gif hwylc broðor oft rædlice geþread for hwylcum gylte bið, ne he furðon for amansunge gebetan nelle, ne his þeawas gerihtlæcan, hine man þreage mid teartran steore, þæt is him sige on *swingella* wracu. (BenR 28.52.4)

Gif he þænne þurh ða *swingella* ne bið geriht, ac on modignesse wuniende mid upahedefnesse his yfelan dæda mid leasum talum bewarian wile, do þænne se abbod swa swa wis læce: (BenR 28.52.8)

（もしも誰か兄弟が何らかの罪によりしばしば責められ、破門によってすら改心しようとはせず、また自分の習癖を改めようとしなければ、彼はより厳しい罰をもって責められねばならない。すなわち鞭打ちの罰が彼に加えられねばならない。

しかし、もしも彼がその鞭打ちによって改善されず、尊大であり続け、増長して自分の悪しき行為を虚偽の話をもって弁護しようとするなら、修道院長は賢明な医者のごとくせねばならない。）

Si quis frater frequenter correptus pro qualibet culpa, si etiam excommunicatus non emendauerit, acrior ei accedat correptio, id est, ut *uerberum* uindicta in eum procedant. (BENEDICT. Reg. 28.1)

Quod si nec ita correxerit aut forte, quod absit, in superbia elatus etiam defendere uoluerit opera sua, . . . (BENEDICT. Reg. 28.2)

（もしも誰か兄弟がどんな罪によってであれしばしば責められ、破門されてさえ改心しなかったならば、彼にはより厳しい罰が課されねばならない。すなわち、鞭(打ち)の罰が彼に対して加えられねばならない。

しかし、もしもそれでも改善せず、あるいは——それがなからんことを——尊大にも増長して自分の行為を弁護しようとはさえするなら、……)

ここで重要なのは、ともに *swingel* に訳されている (27) の *verber* (鞭(打ち)) と問題の (26) の *virga* (鞭) が、明らかに同一の体罰——叱責を繰り返し受けても改善しない修道士への鞭打ち——に関連して用いられていることである。よって (26) の *virga* は、先行する (27) の *verber* の言い換えとして現れていると言える。

ところで (26) の *virga* は、“*plagarum uirgae*” という表現において属格形を取り、*plaga* を修飾している。この *plaga* というラテン語は、原義として、以下の鞭打ちについて用いられた例に見られるごとく、「打撃」を意味する。

(28) *cum interea . . . nulla vox alia illius miseri inter dolorem crepitumque plagarum*

audiebatur nisi haec, “Civis Romanus sum.” (Cic. *Ver.* 5.162)<sup>40</sup>

(その [ 拷問の ] 間、哀れな彼からは、打撃の苦痛と響きの中、……ただこの言葉だけが聞こえた——「私はローマ市民だ」。)

従って *plaga* のこの「打撃」という原義に即して (26) の “*plagarum uirgae*” が解釈されるならば、この表現は「鞭の打撃の」の意味で——問題の *virga* は本来の「鞭」の意味で——とらえられるはずである。<sup>41</sup>

ここで注目すべきは、*plaga* が、以下の 2 例におけるごとく、比喩的に「苦しみ」の意味でも用いられることである。(29) ではトビトの盲目について、(30) ではある女の長年の出血について、比喩的に使用された *plaga* が見出される。

(29) non est contristatus contra Deum quod *plaga* caecitatis evenerit ei (Tb 2:13)

(失明の苦しみが自分に起こったからといって、神を恨まなかった。)

(30) et confestim siccatus est fons sanguinis eius et sensit corpore quod sanata esset a *plaga* (Mc 5:29)

(するとすぐに彼女の血の泉が乾き、苦痛から癒されたのを体を感じた。)

(29) は Lewis-Short の *plaga* II.C の「苦しみ、苦惱(後期ラテン語)」(“*An affliction, annoyance (late Lat.)*”) に引用されている例である。また (30) の *plaga* が由来するギリシャ語原典の μάστιξ (原義は「鞭」) は、比喩的に「苦しみ、(肉体的) 苦痛」の意味で用いられる語である。<sup>42</sup>

(26) の *virga* (鞭) が、先行する (27) の *verber* (鞭(打ち)) の言い換えと考えられることは既に本章で述べた。(26) の *virga* をこのように見なして、さらにそれが修飾する *plaga* を、原義の「打撃」ではなく、比喩的な「苦しみ」の意味——「鞭打ち」の意味と両立する——で解釈するなら (実際 (26) の古英語訳において *plaga* は *wite* (苦しみ) により訳されている<sup>43</sup>)、(26) の “*plagarum uirgae*” は「鞭打ちの苦しみの」の意味で解釈でき、よって (26) の *virga* を、本来の「鞭」の意味ではなく、先行する (27) の *verber* と同じ「鞭打ち」の意味でとらえることが可能となる。その結果この *virga* は、先行する *verber* と同じく *swingel* (鞭打ち) により古英語に訳されたと考えられる。

結論として、古英語 *swingel* がラテン語 *virga* の訳語となるという例外的なケース (BenR 28.52.11) が生じた要因としては、後者を「鞭打ち」という前者

が持つ意味でとらえることを可能とする、以下の2点を挙げることができる。

1. この箇所の *virga*（鞭）が、先行する *verber*（鞭(打ち)）の言い換えであると見なされ得ること。
2. この *virga* が修飾する *plaga* が、「鞭打ち」の意味と両立する比喩的な「苦しみ」の意味で解釈され得ること。

#### 註

1. J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898).
2. R. Morris, *The Blickling Homilies*, EETS 58, 63, 73 (London, 1874–80; repr. as 1 vol. 1967), p. 15.  
古英語のテキストの略記と引用の仕方は、A. Cameron et al., *The Dictionary of Old English: A to F* (Toronto, 2003) に従う。ラテン語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、同辞典または *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1982)) に従う。なお本稿における古英語およびラテン語の引用中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
3. M. Godden, *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s. 5 (London, 1979).
4. B. Thorpe, *Aelfric: Sermones Catholici*, vol. 2 (London, 1846; Nachdr. Hildesheim, 1983), p. 459.
5. H. R. Fairclough, *Horace: Satires, Epistles and Ars Poetica*, rev. ed., Loeb Classical Library (LCL) 194 (Cambridge, Mass., 1929), p. 20.
6. B. O. Foster, *Livy: History of Rome*, books 8–10, LCL 191 (Cambridge, Mass., 1926), p. 108.
7. J.-P. Migne, “Homiliæ XL in Evangelia,” *Sancti Gregorii Papæ I, Cognomento Magni, Opera Omnia*, PL 76 (Parisiis, 1878).
8. J. E. King, *Cicero: Tusculan Disputations*, rev. ed., LCL 141 (Cambridge, Mass., 1945), p. 300.
9. C. T. Lewis and C. Short, *A Latin Dictionary* (Oxford, 1879).
10. L. Verheijen, *Sancti Augustini Confessionum Libri XIII*, ed. altera, CCSL 27 (Turnholti, 1990).
11. M. Adriaen, *S. Gregorii Magni Moralia in Iob Libri I-X*, CCSL 143 (Turnholti, 1979).
12. A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954).
13. H. Sweet, *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, pt. 1, EETS 45 (London, 1871).
14. J.-P. Migne, “Regulæ Pastoralis Liber,” *Sancti Gregorii Papæ I, Cognomento Magni, Opera Omnia*, PL 77 (1862).
15. T. Miller, *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, pt. 1, 1, EETS 95 (London, 1890). (10) は BT の *swingel* I(b) に (1) と並べて挙げられている例である。
16. B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede's Ecclesiastical History of the English People* (Oxford, 1969).

17. H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965).
18. A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. 2-3, SChr 260, 265 (Paris, 1979-80). (11) は Blaise の *flagellum* 3 に (7) とともに挙げられた “Greg.-M. Dial. 4, 11” において見出される 2 例の *flagellum* のうちのひとつである。
19. (12) は Blaise の *uerber* 2 に (8) と並べて挙げられている例である。
20. A. S. Napier, *Old English Glosses Chiefly Unpublished* (Oxford, 1900; Nachdr. Hildesheim, 1969), p. 116. ただし BT は, この “swincla” という語形ではなく, “swinela” という「明らかに c が e に読み間違えられた」 (“c evid. misr. as e” (Napier, p. 116n)) 語形を引用している。
21. R. Ehwald, “Aldhelmus de virginitate: Prosa,” *Aldhelmi Opera*, MGH, AA 15 (Berlin, 1919; Nachdr. München, 1984).
22. J. C. Rolfe, *Aulus Gellius : Attic Nights*, books 14-20, rev. ed., LCL 212 (Cambridge, Mass., 1952), p. 410.
23. A. Souter, *A Glossary of Later Latin* (Oxford, 1949), s.v. *palma*, a slap.
24. (16) は Blaise の *palma* 2 の「頬の平手打ち」 (“soufflet”) に挙げられている例である。
25. ラテン語訳聖書からの引用は R. Gryson et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, 4. Aufl. (Stuttgart, 1994) による。ただし古英語のテキストにラテン語訳聖書が併記されている場合はそれによる。
26. H. Leo, *Angelsächsisches Glossar* (Halle, 1877).
27. OLD の *flagellum* の語源欄参照。
28. Napier, p. 135.
29. C. Brasch, *Die Namen der Werkzeuge im Altenglischen: Eine kulturhistorisch-etymologische Untersuchung*, Diss., Kiel, 1910 (Leipzig, 1910), p. 145.
30. U. Lindelöf, *Der Lambeth-Psalter*, Acta Societatis Scientiarum Fennicae 35, i (Helsingfors, 1909).
31. Lindelöf, p. 307.
32. W. Endter, *König Alfreds des Grossen Bearbeitung der Soliloquien des Augustinus*, Bib. ags. Prosa 11 (Hamburg, 1922; Nachdr. Darmstadt, 1964).
33. W. D. Hooper, *Marcus Porcius Cato: On Agriculture*, rev. H. B. Ash, LCL 283 (Cambridge, Mass., 1935), p. 96.
34. T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford, 1921).
35. S. J. Crawford, *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922; repr. London, 1969).
36. Ex 4:4, 17, 20; 7:9, 10, 12, 15, 17, 20; 8:16, 17; 9:23; 10:13; 14:16; 17:5, 9——これらの箇所は A. B. Smith, *The Anonymous Parts of the Old English Hexateuch: A Latin-Old English/Old English-Latin Glossary* (Cambridge, 1985), p. 200 に挙げられている。なお Ex 7:12 では, アロンの杖を表す *virga* のみならずファラオの賢者と魔術師たちの杖を表すそれも *gierd* に訳さ

れている。

37. 古英語訳福音書 (WSCp) からの引用は W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark; The Gospel according to Saint Luke and according to Saint John* (Cambridge, 1871–87; Nachdr. Darmstadt, 1970) による。
38. A. Schröer, *Die angelsächsischen Prosabearbeitungen der Benediktinerregel*, Bib. ags. Prosa 2 (Kassel, 1885–88; Nachdr. Darmstadt, 1964).
39. R. Hanslik, *Benedicti Regula*, ed. altera, CSEL 75 (Vindobonae, 1977). なお、この箇所は、行間注解である BenRGI (H. Logeman, *The Rule of S. Benet*, EETS 90 (London, 1888)) のラテン語本文では、“Si exhibuit . . . si ad ultimum ustionem excommunicationis. vel plagas virgarum: . . .” (もしも……最後には破門の焼灼あるいは鞭の打撃を用いて、……) となっており、ここでは virga は複数形で、その属格形が修飾する plaga は対格形である ((26) では virga は単数形で、plaga は属格形である)。この virga には——(26) のそれとは異なり、通常の gird と virga の対応関係に即して——gird が注解として与えられている (“gif he gegearcað . . . æt nextan berned amansumunge oððe wita girda” (BenRGI 28.59.11) 参照)。
40. L. H. G. Greenwood, *Cicero: The Verrine Orations*, vol. 2, rev. ed., LCL 293 (Cambridge, Mass., 1953), p. 644. (28) は OLD の plaga 1 の「(ある程度の激しさで加えられた)一撃」 (“A blow, stroke (imparted with some degree of violence)”) という第一義に挙げられている例である。
41. 実際 A. de Vogüé, *La Règle de Saint Benoît*, t. 2, SChr 182 (Paris, 1972) では、(26) の “plagarum uirgae” は「鞭の打撃の」 (“des coups de verge” (p. 553)) と訳されている。
42. W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. v. K. u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. μᾶστιξ 2. übertr. d. Plage, d. (körperl.) Leiden.
43. 「苦しみ」の意味の plaga が wite に訳されている例は、(30) の古英語訳である “. . . þæt heo of þam wite gehæled wæs” (Mk (WSCp) 5.29) にも見られる。